



日本の版画 1931-1940
棟方志功登場

伝説の浮世絵開祖

岩佐又兵衛

人は彼を「うきよ又兵衛」と呼んだ――。

topics

特集：岩佐又兵衛／日本の版画／
モノクローム絵画の魅力

予告：清水六兵衛歴代展

連載：ボランティア日和／展示室で考える

日本の近代版画

私にとって文字通りの座右の書架には、「日本の版画」と題する展覧会カタログが、4冊ずらりと並んでいます。その背表紙に記されている副題と開催された年とを列記すると、次のようになります。

- 1900-1910 版のかたち百相 (1997)
- 1911-1920 刻まれた「個」の饗宴 (1999)
- 1921-1930 都市と女と光と影と (2001)
- 1931-1940 棟方志功登場 (2004)

これらはいずれも当館で行われてきた特別展のカタログで、20世紀前半の日本近代の版画作品を10年間隔で区切り、毎回300点前後の作品を展示してきたものです。現在は4番目にあげた「棟方志功登場」展が、7階の全フロアを使って開催中です。企画担当の学芸員によれば、あと1回、戦中戦後の1940年代を見渡した展観で所期の全5回展が完結するという事です。10年がかりの、まことに気宇壮大で、しかも一回ごとには緻密に構成されたシリーズ展であり、幸いに目の高い観覧者の方々から好評を得ています。今後おそらくは、これらのカタログをひもとくことなしに、日本近代の版画芸術についてなにがしかを語ることはできなくなることでしょう。



棟方志功《釈迦十大弟子二菩薩》より 1939年 千葉市美術館蔵

日本の明治以降近代の版画に関しては、かなり以前から海外の注目を集めてきました。私の古い友人で、もと大英博物館の日本部長であったローレンス・スミス氏は中でもとりわけ高い評価を与え続けてきたもので、そのために大英博物館のこの方面での収集は他を圧倒して素晴らしいものがあります。

日本の版画といえば、海外においていち早くその価値を認められた浮世絵版画がありますが、実はそれ以外にも長く、広い範囲に及ぶ歴史が形成されているのです。

平安・鎌倉時代にまでさかのぼる印仏(いんぶつ)・摺仏(しゅうぶつ)の小さな版画や、室町時代に流行した絵巻や掛幅装の大型な版画など、仏教関係の版画の歴史は思いのほか古いものがあります。安土桃山時代にはキリスト教の布教に役立たせるために、日本の信者によって銅版画による聖画が教会内で作られもしました。さらに江戸時代には、西洋画の合理的な画法を学んで銅版画による鑑賞用の絵画が試作されましたし、中国の文人画譜にならって各流派の画集が木版によって刊行されています。

日本は民衆レベルの文化の成熟度がかなり早い段階に進んでいましたので、多くの人々に安価で等質の絵画画像を送り届けるために、複製美術としての版画が活用されてきたのです。そうした輝かしい伝統の上に浮世絵版画という美味の果実も生み出されたのでした。

浮世絵の美術的な価値を、かつて西洋の人々の熱狂的な愛好によって教えられた過去をもつ私たちですが、20世紀に入って以後の近代版画の歩みに対しても、これまでは少しく冷淡に打ち過ぎてきたのではないのでしょうか。正直に告白すれば、私自身がそうした不明を恥じるきっかけとなったのが、実はこのシリーズ展でありました。今回も、日本各地で版画雑誌が発行されていたことや、多数の有名、無名の版画家によってかくも多彩な表現が試みられていたのかと、会場を一巡しながら驚いたり喜んだりの連続です。皆様方におかれても必ずや、新しい発見や出会いの喜びがあり、新鮮な経験を味わっていただけるだろうにちがひありません。

10月はじめからは、待望の「岩佐又兵衛展」が始まります。当館の初代館長である辻惟雄先生がみずから監修の任に当たり、伝説のペールに包まれた「浮世又兵衛」の実相に間近に迫ろうと努力してくださいました。辻先生という錦の御旗のお陰で、多くの所蔵機関、所蔵家が快く出品に協力してくださったものと感謝されます。

浮世絵の開祖は、はたしてこの岩佐又兵衛なのか、菱川師宣なのか、戦前に大論争が繰り広げられたものです。代表作が一堂に会するこの機会に私もじっくりと考えてみよう、今から楽しみにしているところです。首都圏では約30年ぶりの大規模な又兵衛展となりますので、どうぞくれぐれもお見逃しのないように。
館長 小林 忠



岩佐又兵衛《伊勢物語図》出光美術館蔵

「岩佐又兵衛展」へのお誘い

岩佐又兵衛(1578～1650)の名をご存知でしょうか？かつて、江戸時代初期の優れた風俗画はみなこの人の作と名付けられ、「浮世絵の開祖」ともいわれていた伝説的画人です。「浮世又兵衛」の異名で知られ、近松門左衛門の歌舞伎『傾城反魂香』の主人公「吃の又平」のモデルともなりました。(ちなみにこれは現在まで人気の演目で、今年も七月の歌舞伎鑑賞教室で演じられ、多くの小・中学生が初めての歌舞伎体験をしているのを目にしました。)しかし現在、その名を一般に知る人は、残念ながら非常に少なくなっているようです。謎多きこの絵師の実像を求めて新聞紙上まで賑わせる大論争が巻き起こったり、渦中の絵巻物の展覧会には大行列ができた……明治後期以来のこうした顛末もまた伝説と化し、かつての熱気は何だったのか信じられないほどです。

又兵衛は、伊丹城主荒木村重の子に生まれました。村重は、織田信長に叛旗をひるがえして一族の大虐殺を招き、又兵衛の母も六条河原で惨殺されたようです。時に2歳で乳母に命を救われた又兵衛は、荒木の姓を捨て京都で絵師となり、40歳の頃福井へ、さらに60歳の頃には江戸へ出て活躍、73歳でその数奇な生涯をとじました。桃山から江戸へという大きな時代の変動期、環境の大きく異なるそれぞれの地で彼がどのような作を描いたのか、実は確実な手がかりはわずかで、その跡をたどることは容易ではありません。しかし、豊かな頬、長い顎、芝居がかった大仰な仕草や熱っぽい姿の群衆、人物を描く流暢なそれでいて画面に食い込むように強靱な線。一度見ると忘れられない強烈な印象を残す彼独特の作風は、確かに当時一世を風靡し、のちの絵画に大きな影響を与えたのです。この展覧会は、岩佐又兵衛の功績について、伝説化の様相も視野に入れつつ約100点の作品によりご紹介するものです。関東圏においては約30年ぶりに又兵衛作品を概観できる機会となります。(展示替えがあります。本展ではご要望の多かった会期中のリピーター割引を行います。)

会場ではまず、又兵衛の特異な画才を誰もが確認できたであろう福井での作品からご紹介します。それは、福井藩主から金屋家に下賜されたと伝えられている「源氏物語」や「龍虎図」など様々な画題を多様な手法を用いて描いた作品群で、明治の末に押絵貼屏風の形から掛軸に改装されて各地に分蔵されるものです。同様に岡山の池田家に伝わり、屏風から掛軸にされたので「旧池田屏風」と呼ばれる作品も四図出品されます。いずれも細密で鋭く緊張感ある線描で人の姿もびりりと引き締まって見事です。これらは、又兵衛の評価故に所蔵家たちの手に分けられ、その名を一層高めてきたわけですが、その改装から約



《源氏物語 野々宮図》出光美術館蔵

80年。掛軸の状態や丁重な箱の作りなどを見ると、これまでどれ程の人が開いては巻き、ためつすがめつ、何を語ったかと思わずにはいられません。古典への自由な態度の一端をのぞかせる「人麿・貫之像」のような奔放な作のほか、晩年期のものと思われる繊細で落ち着いた古典作品の中にも、何やら陰影を帯び、どこか卑俗味を含んだ一癖ある表現と見受けられるのが又兵衛画の特徴です。

そして、工房を構えて幅広いレパートリーをものにしたさまを、主に画題ごとにご紹介していきますが、かれら制作集団の見事な成果として日本の絵画史上でも特筆されるのが、いずれも演劇を題材とした内容をもつ豪華絢爛な絵巻の数々です。これらの多くは福井の大名松平家からの注文によるとみられますが、今回ご所蔵者の格別なご協力を得て、その主要な作が一堂に会することになりましたので是非ご期待下さい。

実は、今回の展覧会にとって絶好と言えるタイミングで、企画から20年越しという映画が完成しました。「薄墨の桜」「痴呆性老人の世界」や大長編「歌舞伎役者・片岡仁左衛門」、近作の「平塚らいてうの生涯」などで知られる記録映画作家の羽田澄子氏の演出により、出品作の絵巻「山中常盤」全12巻(重要文化財)を、特別に全巻撮影し、画面一杯に映したものです。会期中に美術館の講堂を会場として、一般公開が実現します。



《小栗判官絵巻》宮内庁三の丸尚蔵館蔵



《人麿・貴之像》MOA美術館蔵(重要文化財)



《山中常盤物語絵巻》MOA美術館蔵(重要文化財)

「ただ一点の本物がそこにある」という実在感はなにものにも代え難いとはいえ、展覧会という場では一部分しか見ることができないのが絵巻物の宿命です。しかしこの映画では、各巻12メートル以上、全12巻にわたり延々と繰り広げられるこの絵巻を、余すところなく見ることができます。そもそも「山中常盤」とは浄瑠璃という演劇として上演された話で、絵巻の文字の部分(詞書)もその台本のような形式をとっているものです。そこで、鶴澤清治氏(平成15年度日本芸術院賞の恩賜賞を受賞)が新たに絵巻にあわせて浄瑠璃節を作曲し、はにわオールスターなど多彩な活動でも知られる邦楽囃子の仙波清彦氏が作詞をし、それにのせて、文楽の太夫、豊竹呂勢大夫氏が絵巻詞書を語るのです。(昭和3年の暮れ、この絵巻がドイツ人に買われ海を渡ろうとしていたとき邸を抵当に入れ私財を売り払ってこれを引き留め、その熱情から「又兵衛やつれ」とまでいわれた所蔵家が、かつてそれを企てたらしいことがその後の新聞評から知られますが、さすがに劇化までは実現しなかった様子。)浄瑠璃や義太夫といっても何を言っているのかわからない、と思われるかも知れませんが、そこは絵の分量が膨大なこの絵巻の本領発揮・魅力全開といったかんじで、これが本当に面白く、わくわくして飽きさせません。見終わる頃には名調子がうつつてしまいそうなほどでしたが、皆さんはどのようにご覧になるでしょうか。5回上映の予定ですが、10月31日(日)の初回上映後には、羽田澄子監督と辻惟雄本展監修者の対談の形で、作品について語るイベントも行います。展覧会にあわせて、こちらも是非お見逃しなく、ご来場をお待ちしております。

ともあれ是非一度、どんなものか絵を見にいらしてみてください。かつて多くの人々を圧倒してきた妖しい魅力をたっぷりご堪能いただき、これに取り憑かれた人々の営みにも思いをめぐらせていただければと願っています。

(学芸員 松尾知子)

伝説の浮世絵開祖 岩佐又兵衛

2004年(平成16)10月9日(土) - 11月23日(火)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日 10月11日(月・祝)は開館、翌12日(火)休館

【入館料】 一般 800(640)円

大学・高校生 560(450)円

中・小学生 240(200)円

()内は前売および団体30人以上の料金

* 10月9日(土) - 11日(月・祝)は中・小学生無料

* 10月16日(土)、17日(日)は市民の日の無料開放日

* 会期中、もう一度ご覧になる方のために、リピーター割引があります。

関連企画

【講演会】

「岩佐又兵衛の逆襲」

講師：辻 惟雄(東京大学名誉教授 / 本展監修者)

日時：10月30日(土) 午後2時より

「江戸の三大風俗画家 又兵衛・師宣・一蝶」

講師：小林 忠(千葉市美術館館長)

日時：11月6日(土) 午後2時より

* 各日とも11階講堂にて 先着150人 聴講無料

【ギャラリートーク】

毎週水曜日、金曜日の午後2時より

10月23日(土)、11月6日(土)の午前11時より

7階展示室入口にお集まりください。

映画上映会「山中常盤 - 牛若丸と常盤御前 母と子の物語 - 」

10月31日(日) 午後2時より 上映後、羽田澄子監督と、辻 惟雄本展監修者の対談があります。

11月3日(水・祝) 午前11時より / 午後2時より

11月14日(日) 午前11時より / 午後2時より

* 各回とも11階講堂にて、先着150人

* 「岩佐又兵衛」展チケット(お一人様1枚)、または友の会会員証をご持参ください。

演出：羽田澄子 撮影：若林洋光 / 宗田喜久松

作曲 / 三味線：鶴澤清治 作詞：仙波清彦

浄瑠璃：豊竹呂勢大夫 ピアノ：高橋アキ

1時間40分 2004年 自由工房作品

「パワー全開の又兵衛の傑作を、さらなるパワーでよみがえらせた羽田さんに拍手を送る。」

— 瀬戸内寂聴 (2004年9月 東京新聞夕刊)

日本の版画・1931-1940・棟方志功登場

この展覧会は、1930年代、昭和でいうと6年から15年にかけて制作された日本の版画を集めたものです。わずか10年の間とはいえ作り手は多く、表現も多彩な時代でした。

来館者をまず迎えるのは、全国各地で出版された版画誌です。版画誌とは、1920年代から30年代の前半にかけて流行した創作版画独自のメディアです。同人たちがそれぞれの作を持ち寄り、綴じあわせた風の素朴なものですが、彼らをやがて「作家」として送り出す研鑽の場として機能しました。また距離を超えて交換され、顔も知らぬ同士をつなぐ結び目となり、版画のさらなる普及にも尽くしました。一冊一冊が若者たちのさんざめきと興奮とを伝え、版画誌を編んでみたい気分へと誘います。

版画誌の産地は青森や東京、静岡、長野、岐阜、愛知、京都、大阪、大分、長崎、台湾などに及び、30年代の創作版画がいかに広がり、層を厚くしたかを教えてくれます。そしてこうした隆盛のなかから、たとえば『白と黒』で活躍した谷中安規が、あるいは『新版画』に拠った藤牧義夫が世に出たのでした(fig.1,2)。谷中安規は、この世ならぬものたちが跋扈する摩訶不思議な物語絵を紡いだ人、藤牧義夫は痛々しいほどに鋭敏な感性で都会の実相を刻んだ人。ふたりの天才がモチーフと孤独に対峙して残した一群は、強烈なイメージをもって見るものに迫ります。

fig.1 谷中安規『白と黒』41号より《蝶を吐く人》
1933年 個人蔵



fig.2 藤牧義夫『新版画』12号より《月》
1934年 神奈川県立近代美術館蔵

30年代にはベテランたちもそれぞれに表現を深め、個性に磨きをかけましたが、その代表格といえばやはり恩地孝四郎でしょう。恩地にとっての30年代は、単なる「版画」を超えたさまざまな試みをなした模索の季節でした。音楽に題材を求め、飛行という体感を造形し、はたまた版画と写真、活字をひとつの画面に構成する(fig.3)。それらは今なお斬新で刺激的な作品です。

錦絵以来の制作法 絵師と彫師、摺師の共同作業による伝統木版の世界でも、30年代はさまざまな版元が粋を競う活気ある時期でした。錦絵が欧米で高く評価されたのはよく知られるところですが、この時代の伝統木版も国外、特にアメリカで人気を呼んだといえます。艶やかな女性像や情緒あふれる風景から、長い年月に培われた彫摺術の、くっきりと澄明な美質を感じていただけたらと思います。

以上のように30年代の版画界はおおむね活況にあったといえますが、戦時色を強めてゆく情勢は、次第に版画家たちに影を落とすようになります。30年代後半に入ると版画誌の多くは終刊を迎え、彫刻刀を手放して戦地へ赴いた者も少なからずいました。そうしたなかで、版画壇に力強く登場してくるのがかの棟方志功です。棟方が本格的に木版を始め、表現を深め、そして世に認められるのは30年代のことでした。彼は「民芸」の

人たちと行動をともしたからか版画史とは別に語られることが多いのですが、川上澄生に打たれ、版画誌に作を寄せたその出発点は、他の版画家と何ら変わりません。その棟方を同時代の版画群と並べた時にどのように見えるか、それが本展の見どころのひとつです。

代表作が並んだ一角で、まず驚かされるのは作品の大きさでしょう。なかでも《東北経鬼門譜》は、版木を120枚使用したという並外れたサイズです。それらの大きさを支える屏風や絵巻といった形式も、彼独特のもので、そしてごつごつと骨太な、墨摺の美しさ。洗練された多色摺を志向する作家が多いなかで、やはり特異といえます。棟方は、当時の版画が優品の数々を生みながらもあまり評価されず、洋画や日本画よりも低い位置にあった状況をよく知っていました。だからまずは型破りな大きさをもって、また木版ならではの黒白の造形をもって、自らをアピールしたのです。そして1938年、《勝鬘譜善知鳥版画曼荼羅》を文展に出品、版画としてはじめての特選を得るといふ快挙をなしました(fig.4)。古事記や生地ゆかりの物語などに取材したことから、ナショナリズムが高揚し、「日本的なもの」を見直す時勢にも後押しされました。30年代は棟方にとって、戦後の「世界のムナカタ」への飛躍を準備した大切な時期といえるでしょう。

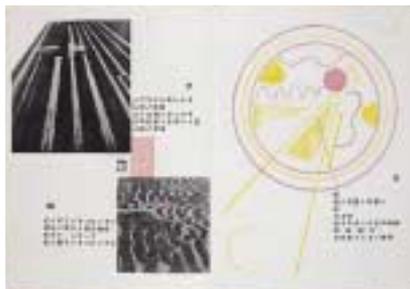


fig.3 恩地孝四郎『飛行機能』より
1934年 千葉市美術館蔵

fig.4 棟方志功《勝鬘譜善知鳥版画曼荼羅》
1938年 青森県蔵



この展覧会は、1997年以来当館で開催しておりますシリーズ展「日本の版画」の第4弾でもあります。過去の展示をご覧になり、続編をお待ちのかたがいらっしゃるとすれば、担当としては嬉しい限りです。シリーズ展として見るもよし、独立した展覧会として鑑賞するもよし、たった10年の間に生まれた作品ですが、見所は満載と自負しております。戦争へと傾く時勢のなかで、作家たちがどのような思いで版に向かったのかを想像しつつ見ると、作品との対話はより深まるのではないのでしょうか。

(学芸員 西山純子)

日本の版画・1931-1940・棟方志功登場

2004年(平成16)8月31日(火) - 10月3日(日)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日 9月20日(月・祝)は開館、翌21日(火)休館

【入館料】 一般 800(640)円

大学・高校生 560(450)円

中・小学生 240(200)円

()内は団体30人以上の料金

モノクローム絵画の魅力

「モノクローム絵画」という用語は、多くの方々にとってあまり聞き慣れない言葉かもしれませんが。単一の色彩が塗られているだけでほとんど何も描かれていない絵画のことを、現代美術の世界では「モノクローム絵画」と呼びます。このような先鋭的、極限的表現の魅力とはいったい何なのでしょう。

周知のように、20世紀の抽象絵画は純粋化、還元化の道を進んできました。とりわけモンドリアンをはじめとする幾何学抽象の系統に属する画家たちは、画面内の諸形態を少しずつ取り去ることで、線や色面を中心としたシンプルな画面を追求しました。それにともない絵画はイリュージョンを生み出す(すなわちイメージを表象する窓としての)機能を徐々に弱め、絵具が塗られたキャンバスそのものとして存在するようになったのです。この物質そのものとなった絵画の極限的終着点こそモノクローム絵画です。何ひとつイメージを表象しないこの種の絵画にとって、表面の質感と色彩だけが表現の全てとなります。アド・ラインハート、ロバート・ライマン、イヴ・クラインらに代表されるモノクローム絵画は、1950年代から60年代にかけて欧米で流行しますが、少し遅れて日本でもこの手法を試みる画家たちが現れました。

「モノクローム絵画の魅力」は、千葉市美術館のコレクションから、1960年代以降に描かれた日本のモノクローム絵画を選びすぐり展示する企画です。単色表現の多様性とその魅力を探るために、桑山忠明、村上友晴、山田正亮、吉永裕、小林正人ら5人の作家による作品18点を展示いたします。

桑山忠明は、シルバーをはじめとするモノクロームのメタリック・カラーを用いて作品を制作します。このニュートラルなメタリック・カラーの絵画は、美術館のニュートラルな白い壁



「モノクローム絵画の魅力」展会場風景 (桑山忠明)

面に複数ならんだとき、最大限にその効果を発揮します。吹きつけ塗装による完璧な仕上げのシルバーは限りなく白に近く、ホワイトキューブである美術館の空間に見事にとけ込み、周囲の空間をも作品に取り込んでしまうからです。桑山の絵画は、平面であるにもかかわらず、絵画を超えた空間芸術として体験されうのです。

村上友晴のモノクローム絵画は、桑山の無機的なそれとはかなり趣が異なります。村上には深い信仰心を抛り所に絵画を制作する画家で、絵を描くことは「祈り」に等しい行為であるとさえ述べています。あたかも修行僧のような生活を送りつつ、時として数年がかりで1点の絵を根気よく仕上げていきます。彼の絵画の極めて繊細な表面は、いかなるイリュージョンも生み出さない物質そのものでありながら、深い奥行きを感じさせるのです。

このように同じモノクローム絵画であっても、桑山と村上の作品は意図するところも違えば、そこに至る道筋も全く異なります。展覧会には、モダニズム絵画の展開を独自の視点から再解釈してモノクロームに到達した山田正亮、巨大な和紙とパステルを用いて新しいタイプの色面絵画を生み出した吉永裕、イメージと戯れつつも絵画の物質的側面をかいま見せる小林正人ら3人の作品も展示されます。彼らのモノクロームもまた、それぞれ独自の視点から必然的に生み出されたのです。モノクローム絵画は無表情で個性を欠いているように見えるかもしれませんが、個々の作品は実に繊細で豊かな表情を見せてくれます。それらは完全に似て非なるものと言えるでしょう。

表現の多彩さに加え、モノクローム絵画の魅力がもうひとつ存在します。それはモノクローム絵画だけが展示されたとき、個々の作品が互いに反響しあい非常に静かで清々しい空間をつくりあげることです。展示室の白い壁を地に個々の絵画が図として配された抽象芸術を見るように、展示空間全体を作品として鑑賞できるのです。しかし残念ながら、写真ではこの効果を完全なかたちでお見せすることはできません。ぜひこの機会にあなた自身の目で、個々の繊細な作品同士が生み出す調和を体験してみてください。モノクロームの静謐な空間に身を置くと、今まで知らなかった美術の地平が開けるかもしれません。

(学芸員 水沼啓和)



「モノクローム絵画の魅力」展会場風景 (左：小林正人 右：吉永裕)

モノクローム絵画の魅力

2004年(平成16)9月7日(火) - 11月23日(火)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日 9月20日(月・祝)は開館、翌21日(火)休館

10月11日(月・祝)は開館、翌12日(火)休館

【入館料】 一般 200(160)円

大学・高校生 150(120)円

中・小学生 100(80)円

()内は団体30人以上の料金

*「日本の版画」(-10月3日まで)、

「岩佐又兵衛」(10月9日 - 11月23日)展チケットをお持ち

の方は期間中のみ無料。

清水六兵衛歴代展 京の陶芸・伝統と革新

秋は観光シーズン。テレビの旅番組では今年も京都が沢山とりあげられています。「清水の舞台」で知られる清水寺やその近くの五条坂はやはり定番。あの一帯がやきものの本場であることも皆さん先刻ご承知の筈。

「清水六兵衛(きよみず ろくべい)」は、この清水・五条坂一帯だけでなく京都のやきもの(京焼、と云います)作家、陶家を代表する存在です。初代から数えると現在で八代目。約230年近く続いています。

なぜ「清水六兵衛」が京焼のなかで重要な存在なのか。それは、代々が受け継がなければならないスタイル、様式や技法が存在せず、各代の創意に任されている点にあります。初代六兵衛が1771年、五条坂で陶家として独立して以来、清水家は先人の精神を受け継ぎ、伝統的な京焼の世界に新しい風を吹き込み続けています。

初代六兵衛は茶道で使われる茶碗や、当時広がりを見せ始めた煎茶の道具を作ることに長じ、当時の文化人や豪商たちに技量を認められました。江戸前期の野々村仁清や中期の尾形乾山のような視覚的な華麗さはありませんが、どの作品も渋さが光る佳品です。

江戸期から明治にかけて日本のやきものは、外貨を獲得することのできる数少ない産業でした。加えて、化学的な知識と経験を必要とするために工業への転換が図られたこともあります。事実、現在のファイン・セラミックス企業の創立をたどれば、陶家をその起りとしている例があります。清水家でも当時の当主だった三代は西洋風のタイルだけではなく、化学工業



六代清水六兵衛
《古稀彩秋映花瓶》
1972年

用の製品を試作したと伝えられています。

芸術と産業が不可分な結びつきだった時代から、大正を経て昭和に入ると、清水家の当主は自らの作るやきものが芸術の一ジャンルであることを強く主張するようになります。昭和戦前期の五代は関西を代表する「陶芸家」としてその手腕を発揮し、続く六代は戦後、日本的な美意識の追求に後半生を費やしています。1980年に東京の百貨店で清水家の歴代展が開催されたことがありましたが、六代はその初日の挨拶中に倒れ、そのまま亡くなられてしまいました。今回の展覧会はこの時以来、首都圏で開催される久々の清水家の歴代展となります。

七代は、「清水九兵衛」という名で知られた彫刻家でもありますが(この方は戦後の一時期に千葉市内・稲毛に住んだこともあり、それは現代史の一ページと深く関連しているのですが、ここでは割愛します)。現在、六兵衛の名を八代に譲られてからは彫刻に専念し、活躍中です。本展では七代の彫刻の代表作も多数展示します。この他にも歴代と交流があった富岡鐵齋や幸野楳嶺、神坂雪佳などの作品も併せて展示するなど、今回は単なる「やきもの展」ではなく、江戸後期から現在まで連続と続く美意識の流れを紹介するよう企画しました。

現在、清水六兵衛は2000年に八代が襲名し、歴代の品格ある作陶に加え、父・九兵衛が試みている空間造形における実験的精神を受け継いでいます。

(学芸員 藁科英也)

清水六兵衛歴代展 京の陶芸・伝統と革新

2004年(平成16)11月30日(火) - 2005年(平成17)1月23日(日)
10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日 1月10日(月・祝)は開館、翌11日(火)休館
年未年始 2004年12月29日(水) - 2005年1月3日(月)

【入館料】 一般 800(640)円

大学・高校生 560(450)円

中・小学生 240(200)円

()内は前売および団体30人以上の料金

ボランティア日和 episode 5

実際にボランティア活動が始動して、一年半が過ぎようとしています。今までの一人のビジターから一転して、作品について語りながら皆様と共に楽しむという難しい立場にとまどいながら、毎度苦心の連続です。特に最近小学生の鑑賞教育へのお手伝いを経験させていただき、子供達への教育が大人対象のギャラリートークとは全く異なる事を痛感した次第です。

ところで最近の私の喜びの発見は、キュビズムの画家であるジョルジュ・ブラックの作品でした。「職人氣質」と言われ、完全を求め続けた彼の作品にはキャンバス全体に計算しつくされた苦心の技法が様々に見え隠れしているのを知りました。本物を見て自分でそれを発見したことは私にとって大きな収穫でした。

展示室の中で作品とじっくり向き合うことの楽しみが、植松さんの言葉からは伝わってきます。そんなわくわくする気持ちを感じてもらいたいと思いながら、ボランティアズと職員は、今日も皆さまの来館をお待ちしています。

貴重な作品が遠方から多くの人の手と努力によって美術館に運び込まれ展示開催に至るのを目の当たりにし、それを見る機会に恵まれる事の素晴らしさを感じます。作品をゆっくりご覧下さい。美術書のどこにも書いていない自分だけが知る作者の心を発見する事が出来るかもしれません。芸術の秋です。さあ、美術館にいらしてみませんか。

美術館ボランティア 植松信子



展示室で考える

心から心へ

少数民族の衣装などを展示した前回の企画展「太陽と精霊の布」のアンケートを拝見していて、何だかとても印象深く嬉しかった感想は、10代の方からの「マジよかった」(表記のまま)というものでした。飾り気のない普段のままの言葉ですが、それだけに、こんなに若い世代の方が感動してくれたということがストレートに伝わってくるようでした。少数民族の信じられないくらい手の込んだ染織品を、この便利に機械化された世の空気を吸って育つ若い人が感動してくれたなんて、少し意外な気さえしましたが、でもこんな嬉しいことはありません。

展示室で声をかけていただいたお婆さんの言葉も印象に残っています。すべての染織品は家庭で、お母さんや娘さん達が作るのだということをお話すると、「こんなものを作るなら女の人はやっぱり神様ね。」とおっしゃいました。そして温かい笑顔をくださいました。

「人間も捨てたもんじゃなないと久しぶりに思いました。」とアンケートに書いてくださった方もありました。人間不信になるようなニュースを毎日見聞きする世情だからこそご感想だったのかなと想像します。

この展覧会の会期中講演して下さったテキスタイルプランナーの新井淳一先生は、最先端の布を作っている第一人者であり、世界の伝統的な布に造詣の深い方です。先生は「人の世がどれだけ続くかわかりませんが、どうか戦いと貧困から縁を切って、やさしい心と心が通い合う世になってくれるといいなと思います。そのような願いの源流が女の人たちが心を込めて作ってきた布にあるのではないかと思いますし、それは新しい布作りの仕事の上でも見失ってはいけないことだと思います。」という言葉でご講演を結ばれました。少数民族のお母さん達が、赤ちゃんを守るために心を込めて作るおぶい帯のことを思い出して胸を熱くしたのは、私だけではなかったでしょう。

少数民族たちの純粋な表現は、様々な世代の、そして手作りとは縁遠い私たちの心にも、豊かなメッセージを伝えてくれたようです。「マジよかった」の男の子も誰かに展覧会のことを話してくれたのでしょうか。会期の後半には、知人にすすめられてというお客様がずいぶんいらっしゃったようです。当館では染織について専門の学芸員もおらず、拙い面のご指摘も含めてですが、開催にあたり関わった方々、お客様の言葉を通して、何か美術館の可能性を広げられたような気がしています。そしてあらためて、美術館の仕事とは、作り手の心を見る人の心に伝える橋渡しの仕事なのだなと思いました。(ta)



自作の布を紹介する新井淳一氏(2004年7月18日講演会にて)

連続講座のお知らせ

千葉市が今まで収集した美術品は、企画展や所蔵作品展でテーマを決めて公開していますが、コレクションされた美術品が美術史の中でどのように位置づけられるのをご存じでしょうか？

千葉市美術館では、今年度からコレクションを理解していただくための市民美術講座をスタートいたしました。作品の slides を映しながら、わかりやすく解説いたします。ふるってご参加下さい。

第6回 10月9日(土)午後2時より

「18世紀の浮世絵」

講師：田辺昌子(千葉市美術館学芸員)

第7回 11月21日(日)午後2時より

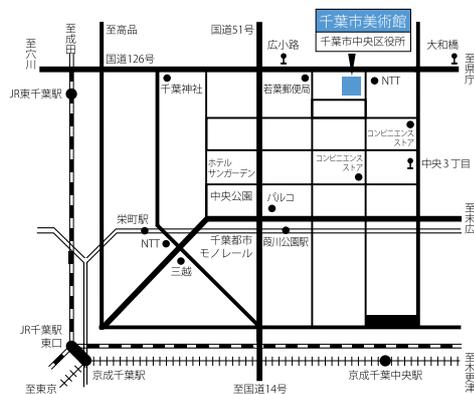
「幕末・明治の浮世絵」

講師：浅野秀剛(千葉市美術館学芸課長)

第8回 12月18日(土)午後2時より

「琳派～宗達・光琳・抱一」

講師：松尾知子(千葉市美術館学芸員)



JR千葉駅東口より徒歩約15分 / 千葉都市モノレール興庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分 / バスのりば①より大学病院行、南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩2分 / JR千葉駅へは東京駅地下ホームから総武線快速千葉方面行で約42分

京成千葉中央駅東口より徒歩約10分

東京方面から車では京葉道路・東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ貝塚ICで出て国道51号を千葉市街方面へ約3km 広小路交差点近く地下に駐車場有り



【編集・発行】 千葉市美術館 〒260-8733 千葉県千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chiba 260-8733 Japan

【発行日】 2004年9月20日

【印刷】 株式会社プリンテックメディア